

仕事の経験を私生活に生かし、私生活の経験を仕事に生かす

*To Make Use of Experience at Work in Private Life
and to Make Use of Experience in Private Life for Work*

越 山 直 子*

(KOSHIYAMA Naoko)

I. はじめに

筆者は、土地改良区に技師として十数年勤務し、3年前に研究所の研究員へ転職した。土地改良区では、さまざまな業務を通じて、地元農家や関係機関と連携し、地域の課題をどのように解決していくか、技術的、ソフト的な過程を経験してきた。現在所属する研究所では、土地改良区で得た経験を生かし、現地調査から研究成果の普及の段階に至るまで、地域に既存のネットワークを活用しながら、効果的に調査・研究を進めたいと考えている。

また、社会人経験の年数を重ねていくと、職場内の自分の位置や、ライフステージにも変化が生じる。これに伴い、新人の頃と同じような働き方はできなくなることから、「仕事と生活との調和」にむけた働き方を考える必要が生じる。本報では、これまで筆者が経験した業務の概要と、仕事と生活との調和の実践状況について紹介する。

II. 土地改良区における業務と職場環境

1. 技師として経験したこと

筆者がかつて勤務していたのは、越後平野の最下流域を受益とする土地改良区である。かつては「芦沼」や「地図にない湖」と呼ばれていたが、一連の土地改良により乾田化され、現在では豊かな穀倉地帯となっている。土地改良区の管轄面積は約1万haであり、約4割を農地が占めている。新潟市の中心部に近いことから、都市化、混住化が著しく、農地面積、農家数ともに減少傾向にある。低平な輪中地帯であり、農業用水の取水は揚水機場から行われ、地区内の排水は排水機場から行われている。土地改良区には、約50名の職員がおり、農業水利施設の維持管理、施設使用の手続き、施設の工事、企画調整、総代会などを担当する部署がある。部署間の異動はあるが遠方への転勤はないため、腰を据えて地域農家と向き合いながら仕事ができる。

筆者が就職したのは、土地改良法が改正されて「環境への配慮」がなされるようになり、「住民参加」による農業水利施設の維持管理に関する取り組みが始まろうとしていた頃である。学生・院生時代に農村地域の水循環管理をテーマに研究をしてきたことから、水循環管理の実務に関わりたと思っていて。最初に担当したのは、①水路改修計画と維持管理を住民参加で考えるワークショップなどの企画、②非灌漑期における農業用排水路への浄化用水の試験通水に関する業務であった。両方の業務を通じて、調査計画の検討や地元農家、地域住民、関係機関（国、県、市）との調整や協議、水辺（農業用排水路）の利活用など、あらゆる実務に関わることができた。業務を進める際は、末端の水利系統や分水施設の構造の把握、施設の他目的使用申請の手続きなどについては、各部署の担当者の協力を仰ぎ、管内の用水路や排水路の状況については、地元農家の方から水利施設の管理方法を教えていただいた。最終的には、平成19年から新潟市が非灌漑期の環境用水の水利権を取得し、土地改良区も維持管理やその利活用に大きく寄与している。長い時間をかけて、多くの人の力を合わせて一つの成果を得たわけだが、筆者もその一員として関わったことは大きな喜びである。広報担当の部署では、小学生や一般住民の視察対応をしたり、自然観察会を開催したりした。所内で異動があっても、同じ管轄区域を対象としているので、さまざまな角度から農家や地域住民に関わることができたと感じている。

2. 働き方の変化

当時を振り返ると、住民参加によるワークショップを頻繁に開催していた時期は、休日出勤や時間外に地元説明会に出ることもあった。このほか、数は多くなかったが、研修などで泊まりの出張へ行くこともあった。少しでも地元農家や地域住民と直に話す機会を多く持ちたい、研修や外部発表で知見を広げたいと考えていたので、まったく負担は感じなかった。

しかし、出産後はそれ以前と同じような働き方では

*土木研究所寒地土木研究所



ワークライフバランス、技術者、研究者、現場報告、育児

きなくなった。筆者は、これまでに3回、産休・育休を取得した。育休を取得したのは、第1子のときは1歳になるまで、第2子と第3子のときは、7～10カ月までの期間である。下の二人のときは精神的に余裕があったので、早く仕事を再開したいと思い、タイミングを見計らって入園申込みをしたためである。子どもが1歳になるまでは、育児の時間短縮制度を使い、1時間早退した。夫は民間企業の会社員であり、出張も多く、残業や休日勤務も常態化していた。このため、自宅と勤務先のほぼ中間にある保育園を選び、筆者が車で朝晩の送迎を行うこととなった。この保育園の送迎と子どもたちの世話をするには、時間外勤務を控えなければならなかったが、仕事が定時で終わらない場合は保育園の閉園時間（19時）まで粘ることもあった。また、どうしても行きたい研修や地元説明会で遅くなる場合にはベビーシッターを外注した。しかし、泊まりの出張の場合には、遠方の母に応援を要請し、しばらく泊まってもらうこともあった。

平常時はうまく回っていても、突然の病気・怪我のときは迅速に体制を整えなければならない。子どもの面倒を頼める身内が近くにいないため、子どもの発病時は小児科併設の病児保育室が頼りであった。非常時に備えて、仕事の面では周りへ迷惑をかけないように、普段から余裕を持って業務を行うこと、自分が何をどこまでできているかを同僚や上司へ伝えることが重要である。これは、子どもへのしわ寄せを最小限にするためにも必要なことである。

このほか、予測していなかった事態や、先が見通せない場合にはさらなる不安がつきまとう。筆者の場合、子どもが不調により一時期、登下校に付き添いが必要となることがあった。職場の上司をはじめ、学校の担任の先生、保健室の先生、病児保育室、保育園のサポートにより、長期に及ばなかったが、子どもと向き合う時間や自分の働き方を見直す機会となった。

振り返ると、職場内には女性の技師がほかにいなかったため、周りからは筆者が無理をしているように見えた部分もあったかと思う。決して無理はしていなかったが、当時の上司は、「この仕事をやりたい」という筆者の気持ちを受け止めて、常に気遣ってくださった。上司や同僚には多大な迷惑をかけたが、感謝の気持ちでいっぱいである。

III. 研究所における業務と職場環境

1. 研究員として感じたこと

転職先は、積雪寒冷地を対象として、道路、地盤、雪氷、水産土木、農業の分野の技術開発、研究を行う国立研究開発法人の研究所である。筆者は寒地農業基

盤研究グループの水利基盤チームに所属し、大区画水田の水管理に関する研究を担当している。筆者が所属するチームには、北海道開発局からの出向者が半数を占めており、お互いの職務経験を生かしながら業務を進めている。このため、人事異動により定期的にメンバーが入れ替わる。この研究所では、開発局からの技術相談も受けたり、開発局の出先機関である農業事務所と連携して調査・研究が行われたりしており、行政とのつながりが強いという印象である。当研究所は専用の調査圃場を持っていないので、農家の協力を得て圃場に観測機器を設置し、調査を実施している。

筆者は現在、主に空知地域の大区画圃場と未整備圃場や周辺の水環境を対象に調査を行っている（写真-1）。前職と比べて大きく変わったのは、業務の中で一般農家と話をする機会が減ったことである。また、筆者は北海道での業務経験年数が浅いので、新潟での見たものや経験したことが自分の物差しになっている。北海道へ来て、大区画圃場の大きさに圧倒されたし、4月を過ぎても雪が残っていることも知った（写真-2）。これからはいろいろな現場へ行き、協力農家



写真-1 未整備圃場の水利系統を調査する筆者



写真-2 幹線排水路周辺の積雪状況
(平成28年3月下旬, 美唄市)

以外の一般農家がどのような営農管理を行っているのか、標準的な水管理は道内の地域ごとにどのように異なるのか、情報を収集したい。

北海道では、大区画化と併せて地下水位制御システムの整備が進められている。整備圃場の基本的な仕組みは同じであるが、地区によって集中管理孔の構造や立地条件、気象条件が異なる部分がある。そこで、北海道開発局、北海道、道内の農業関係の研究機関により構成される「大区画圃場連絡会議」では、国営事業、道営事業の整備地区の視察や、各機関が大区画圃場で行っている調査・研究についての情報交換が行われている。水管理や土壌だけではなく、ICT 農業の試験や生産性に関する調査など、さまざまな角度から道内の大区画圃場の最新情報を得られる絶好の機会である。

2. 変化する家庭環境

転職して最初に驚いたのは、女性の研究員の数である。前の職場では、女性の技師は筆者のほかにも1人いたが、退職したために筆者だけであった。ところが、現在所属するチームには研究員が10人いるが、そのうち女性は2人である。同じ農業グループである隣のチームでは、研究員7人のうち女性は2人である。所内全体をみても、このグループでの女性の研究員の比率は高い。彼女たちとは調査圃場が同じなので、現地作業の調整や連携を密に行っている。育児中のため、フレックスや育児短時間勤務制度を利用している者もあり、時間が制約される中、学校や保育園の行事や病気のケアなどの時間をやりくりするのは、ごく普通のこととなっている。

大区画水田に関する調査は、空知地域や道南地域の圃場で調査を行っている。たいていは日帰りだが、地域によっては泊まりがけとなることがある。子どもたちがいるので仕事をセーブしている部分もあるが、家族のサポートにより、学会や会議で国内外に出張する機会をある程度増やすことができた。これは、夫が転職したこと、家族で両親宅の近くに転居したためである。家事や子どもたちの世話や学校行事などを以前よりも分担できるようになり、時間的にも精神的にも余裕ができたと感じている。

1日の時間を有効に使うには、「ゆずれること」と「ゆずれないこと」を選別し、優先順位を付ける必要がある。新しい仕事に挑戦する気持ちも大事にする一方で、「ときには仕事を断る勇気」や「断っても大丈夫な仕事を選別する力」を磨くことが必要だと考えている。

IV. 「仕事と生活との調和」にむけた知恵

ライフステージや家庭環境の変化に伴い、働き方を

見直した結果、仕事への向き合い方も変わってきた。大きな転機は、1回目の産休前に仕事の引き継ぎを行ったときである。思入れのある業務だったのでとても不安だったが、上司や同僚に仕事を引き継いだり、業務には何の支障もなかった。担当者の個性が出る部分もあるが、担当していた仕事の大部分は自分でもなくても代わりがきくこと、1人が抜けた程度では組織への影響は小さいことをあらためて知った。

日頃からの情報発信とネットワークづくりも重要である。PTA 活動や地域活動は、時間的に厳しい面もあるが、できる範囲で都合をつけて関わるようにしている。そして、なるべく多くの人たちと、直接関わる機会を大切にして、自分にできることとできないことを明確に伝えることを心がけている。働き方の多様化が進む中、各人により事情や背景、考え方が異なることを認識した上で、協力・支援体制を構築するのが望ましいと考える。その結果、さまざまなスタイルへの理解が深まり、職場の協力・支援体制や地域のネットワークが強固になるほど、「仕事と生活との調和」を実現しやすくなるのではないだろうか。

年を経て、家族や自身の健康状態、親の介護など、生活ステージや家庭の状況が変わるたびに、自分の考え方も変化することが想定される。これからも「現場での経験を生かし、研究活動に励むこと」、「仕事での経験を私生活に生かし、私生活での経験を仕事に生かすこと」を基本方針として、しなやかさを持ちながら「仕事と生活との調和」に努めたい。

V. おわりに

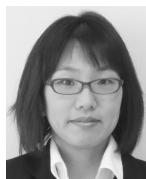
上記は、筆者の経験に基づいた一例である。農業農村工学を学ぶ学生諸君には、積極的に挑戦する気持ちを大事にしてほしい。その結果がどうであれ、そこで得た経験と人との縁を大切にすれば、自分自身が成長するとともに、よりよい道が切り拓かれるはずだ。

最後に、これまでにお世話になった方々と常にサポートしてくれる家族や上司、同僚に謝意を述べる。

[2017.3.29.受理]

越山 直子 (正会員)

略 歴



1972年 東京都に生まれる
2000年 亀田郷土地改良区
2014年 土木研究所寒地土木研究所
現在に至る